

令和元年度第2回かつの未来会議

日 時：令和元年12月12日（木）18時30分～20時20分

場 所：鹿角市交流センター 第1研修室

出席委員：9名（欠席：6名）

出席職員：[政策企画課] 阿部課長、古田政策監、海沼主査、佐藤主査

1 開会（進行：政策企画課 古田政策監）

ただいまから、令和元年度第2回かつの未来会議を開会いたします。

2 会長挨拶

今回の会議の主な内容は意見交換であります。他の方の意見を聞いて、新たな気付きもあるでしょうから、活発に意見を出していただきたいと思いますのでよろしくお願いします。

3 報告事項

まちづくり中高生アンケートの分析結果について（資料7）

説明：政策企画課 佐藤主査

質疑応答

（会長）子どもたちが、希望職種がないからと回答したところがありましたが、どんな職業に就きたいと思っているのですか。

（事務局）鹿角管内の高校2年生を対象に、産業活力課や県が主体となって行う地元企業説明会がありますが、学生たちは具体的に何をやりたいのか、希望職業について絞れていない傾向があります。先日開催しました「かつの未来の若者会議」での子どもたちの声を聞くと、「仕事がないから」という意見がありましたが、「どういう仕事があるのか知らないから」と置き換えられるのではないかと考えています。第6次総合計画でも地元就職を促進する取組は進めていますが、地元企業を知ってもらうということは、引き続きテーマになっていくと考えています。

（事務局）今回のアンケートでは、どういう職業があれば鹿角市に住みたいのかダイレクトに聞くことも検討しましたが、中学生も対象としていたので、まだ選択できない人も多いのではないかと考え、まずは将来に向けてどういう力を身に付けていきたいかというところを聞きました。例えば、語学・コミュニケーション能力が一番多く選ばれていますが、身に付けたいスキルと職業に関連付けた分析

ができないかという考えから、このような設問にしています。居住意向を持つ人が磨きたいスキル、鹿角から出たい人が磨きたいスキルなど、クロス集計もできたので、職業に関連付けた分析で子どもたちの意見を反映させるようにしたいと考えています。

(委員) 学生たちは語学コミュニケーションを身に付けて、何をしたいのかよく分からないと感じました。今、英語を使う仕事はたくさんあると思います。

(事務局) 特定するのは難しいと思いますが、経済もグローバル化していますし、田舎にいながらも都会と同じような国際感覚を磨いていきたいという価値観を持っているのではないかと捉えています。

(委員) 学生の経験値で結果が変わると思います。「住みたい」という学生がたくさんいるようですが、住むためには職業があるのが必須条件だと思うので、住みたい理由で、家や家業を継ぐからとか、希望する職場や職業があるからなどを選んでいる人は「住みたい」に入るとと思いますが、それ以外の結果は曖昧で漠然とした設問と回答だと感じました。もっと明確に聞いてもよいと思います。

4 議事

(1) ディスカッション (資料8・9)

説明：政策企画課 海沼主査

● ここ10年で鹿角市の良くなったところ・そうでないところ

(委員) 子育て支援が進んだと思います。保育料の補助やサークル活動など、子育て世代が集まれる場所が増えたほか、地域と学校が連携する取組も充実してきたと感じます。一方で、仕事はいろいろあるのですが、子どもたちに伝わっていないので、鹿角に就きたい仕事がないと考えてしまうのではないのでしょうか。情報発信が大事だと思います。

(委員) 道路はバイパスができたりして、アクセスが良くなったと思います。逆に良くなっていないところは、農業を継ぐ人がいないため、親から子へ農業技術が継承されず、農業従事者が少なくなりました。法人化を進めていますが、その中でも10年前より人手不足であると感じます。

(委員) 福祉分野では施設が増えて、デイサービスも充実するなど、高齢者にとっては良くなったと感じます。以前は短期入所などでも利用するのが大変でしたが、今は施設に余裕があり、充実していると思います。その一方で、そこで働く人がいない問題もあるようです。残念なのは、以前は各施設で必要な食材などは市内業者で賄っていたように思いますが、最近は市外から調達していると聞きました。また、児童が少なくなり、学校の統廃合で通学距離が長くなったことも子どもたちにとっては大変なことだと思います。あとは自治会内に上水道が通り、清潔に暮らせるようになりました。

(委員) かつの厚生病院が移設したのは良かったのですが、開業医が減ってしまいました。また、元々かつの厚生病院があった場所では飲食店が減ってしまいました。田んぼの整備や下水道の整備などで良くなった部分はありますが、それを活用する人が少なくなっていると思います。介護予防の面では、いろいろな対策がとられていて、これからも需要は大きくなっていくのではないかと思います。

(委員) 地域内外で鹿角市のことを主張できる人たちが増えたように感じます。市外にいても市内の人

とつながって、鹿角市に興味を持たせるような情報を発信する人たちが出てきましたし、市内でも自分の考えを主張できる人たちが増えてきました。ただ、主張する人が固定化してきているので、そのような人がもっと広まれば良いと思います。また、団体での活動が盛んではないように感じます。

(委員)「スキーと駅伝のまち」というスローガンを掲げて、全国規模の大会などを誘致しているのは評価されるべきところだと思います。ただ、スキーや駅伝に関わりがない人たちにとっての認知度は低いので、もっと認知度を高めることが必要だと感じます。市外の人にとっては熊のイメージが強いので、「スキーと駅伝のまち」を継続して発信し、これからも鹿角市のシティブランドとしていくことが大切だと思います。教育では、小中学校が統合されてはいますが、それでも学級数が少ないです。学級数が少ないことはメリットもありますが、社会性の育成の観点からデメリットもありますので、地域の人が入ってカバーすることも必要だと思います。福祉の分野では、いろいろな老人施設ができていますが、介護を受ける側が施設で介護されたいのか、在宅で介護されたいのかが問題で、国でも在宅での介護を推進しているので、介護を受ける側の希望に添えるようなコーディネーターが必要だと思います。

(委員) 移住してきたので 10 年前のことは分かりませんが、今感じるのは、インターネットを通じていろいろな情報が増え、広がっているということです。そういう情報が鹿角市の移住にもつながっていると思います。逆に良くないと感じるのは仕事の環境で、私のように夫婦のみで暮らしていると、副業を持つなどの働き方をしなければ暮らしが大変だと感じます。鹿角市は 3 世代で暮らす人が多いので、暮らしのスタンダードが大家族であることが前提のような気がします。

(委員) 街並みを見て変わったと感じるのは、ドラッグストアやコンビニエンスストアが増えたことです。消費者としては、買い物の楽しみが増えるなど、環境面でメリットがありますが、逆に個人商店が圧迫されていることにもつながっているのも、良いところとそうでないところの両面があると思います。また、産婦人科の問題もありますが、産むことはできなくなったけれど、育てるには最高の場所だというイメージを発信していければよいと思います。

(会長) 産婦人科の意見が出ましたが、今日欠席の安保委員から意見が寄せられているようなので、事務局からお願いします。

(事務局) 安保委員からのご意見を皆さんにご報告いたします。「これから人口減少が続いていくことだと思います。産婦人科の分娩機能の集約のように、様々な機関がいずれかに集約されることが予想されます。そのすべてに歯止めをかけることは不可能であると考えますので、近隣であれば大館市への交通インフラの整備は必須でないかと思います。いかに住民の負担を軽くするか、これから長く先を見据えていく上では絶対に外すことのできない課題だと思いますので、検討していただければと思います。」以上です。

(会長) 私が感じているのは、子どもがふるさと学習をする機会が増えていると感じます。小さいころからふるさとを知ることということで、アンケートの結果にも表れていると思います。先ほど、良いところとそうでないところ、両面があるという話がありましたが、人口減少に関する問題に対し、危機感を持つ市民が多くなっているのではないかと感じています。民間主体でやるワークショップなどの機会も増えており、自分たちがどういうまちに住みたいか、どういうまちにしていきたいかを自分たちで考え、取り組もうとする市民が増えたように思います。

- (委員) 鹿角市にラジオの放送局ができたのは良かったです。今まで知らなかったことなど、たくさん情報が得られて良かったと思います。
- (委員) 10年前は八幡平や十和田湖の観光に力を入れていたと思いますが、最近はあまり力を入れていないような気がします。鹿角の人も訪れなくなっているようです。八幡平や十和田湖はここに暮らす私たちの財産であり、観光地としての活力を取り戻せるよう力を入れてほしいです。
- (委員) 世帯構成で、高齢者単身世帯と高齢者夫婦のみの世帯が10年前に比べるとどんどん増えていきます。生活すること自体が難しくなると思うので、行政の施策で高齢者が暮らしやすいまちにしたいと思います。
- (委員)「スキーと駅伝のまち」という話がありましたが、小中学校ではスキー授業が少なくなったし、スキーをやりたくても、お金がかかるから続けられないという人も多いと思います。花輪高校では週1回スキー授業がありますが、小中学校での経験が少ないのでうまく滑ることができない子も多いようです。もっとスキーが身近になって、活発になればいいなと思います。
- (委員) 高齢者世帯も増えていて、地域の除雪が困難になってきています。市から除雪機を貸してもらえますが、それを使える人も高齢化してきており、人材も不足してきています。
- (委員) ボランティアでやっているのが問題なのだと思います。
- (委員) 小学校が近くにあったので、子どもたちが歩いていた道路は教員や父兄が除雪をしていましたが、小学校がなくなってからは高齢者だけが歩くようになりました。自分でも除雪してきましたが、除雪できる人も少なくなり、雪で高齢者が歩けなくなってきました。また、一人暮らしの認知症の方もいて、24時間ケアすることが難しくなっていると感じています。

● 今後目指すべき理想の姿について

- (委員) 田舎にないものは作ればいいという考えで、鹿角であればどのような姿がベストなのか、鹿角版と呼べるような実現可能なものをみんなで考えていければいいと思います。それを考えるためのスキルとして、起業するための学びの場、学校では学べないようなことを学べる場が提供できればいいと思います。学生だけではなく、大人も学べる生涯学習につながるようなところがあればいいと思います。
- (委員) 自分たちで生み出す力、ないものは自分たちで作ればいいと思います。文化や仕事も自分で生み出すことができるし、それを外へ発信してくことで新たなつながりが生まれてきます。健康面についてですが、鹿角の人は漬物などで塩分を取り過ぎているように感じます。高齢になっても健康なことが大事なので、若い人も高齢者の方も健康管理として食生活を見直すことが必要だと思います。
- (委員)「スキーと駅伝のまち」の情報発信をして認知度を高めることが必要ですし、市民も認知して取り組むことが必要だと思います。また、学校の再編をしても教育の質を落とさないことが未来につながると思います。大学も知識を教えるだけでなく、変化に対応できる多角的な教育をメインにしているので、鹿角の良さを受け止められるような教育が必要だと思います。人口については、人口の減少が税金の負担にもつながるので、目標としては3万人がいいのではないかと思います。高齢者が健康に暮らせるような施策をたくさんして、健康寿命を延ばしたりすると医療費や介護保険料が削減できると思うので、シルバーリハビリ体操などの対策で高齢者の健康を保つまちであればいいと思います。

す。

(委員) これから目指すべき将来の姿は、地元のいいものをどう活用するかだと思います。今ある文化や資源を外に発信していくことが大切です。また、地元で起業する人が出てくるのが理想なので、学びの場や体験の場などの教育システムが必要だと思います。先日、中学生がいろいろな仕事を体験できるイベントがあり、私はボランティアで参加しましたが、子どもの希望を否定せず、鹿角にある仕事以外も取り込んだとてもいいイベントだと思います。

(委員) 「スキーと駅伝のまち」の話が出ましたが、それに温泉なども活用しながら、健康寿命を延ばしていくことをまちぐるみで取り組めればいいと思います。みんなが長生きでき、健康を高められるまちとして売り出せればいいのではないのでしょうか。県内の自治体では、IoTを活用した高齢者を輸送する無人バスの運行がなされており、新たなビジネスにもつながっていくと思います。

(委員) 小さなことですが、交通安全について、歩行者の意識も高まるような取組もできればいいと思います。また、私の自治会では市の補助があるサロンは開いていないのですが、有志が毎週自治会館に高齢者を集めて若い人たちも参加した交流会を開いてくれています。自治会からお金も出ていないし、すごいなと思って話を聞いてみたら、自分たちが高齢者になったときのために、30代や40代の若い人たちにも今の自分たちの姿を見てもらいたいと話していました。市にだけ頼っても、市も限度があると思いますし、自治会の人たちもそれを分かっている自分たちでやろうと取り組んでいます。自治会でも努力はしないとイケないと思います。そのきっかけを市で作ってもらえたらいいと思います。補助するからやりなさいだけではなく、そういう環境づくりを指導してほしいと思います。

(委員) 目指すべきまちとして、できることは既にやっていると思いますが、自分が子どもの頃よりも職業体験によく取り組んでいるように感じます。ただ、小学生などが実際に職場体験するのはまだ早いような気がします。その前の段階の職業紹介などが足りていないと思うので、PRする機会を増やすことと、実際に働いている人から話を聞いて、どういう職業が自分に合っているのかを考えてもらう取組が必要ではないかと思います。農業では、果樹産地協議会において、農家以外の人にも技術講習会に参加してもらい、農家とマッチングさせようという取組をしています。全国的には農福連携や農業の働き方改革の話題もあり、例えば市外から人を連れてきて手伝ってもらうという取組をしている地域もあるので、そのような農業を守る仕組みも必要だと感じます。

(委員) 仕事がないわけではなく、むしろ人手不足の状況だと思います。今働いている人が元気に暮らしていないと子どもに伝わらないと思います。若い人と話をする機会があるのですが、今の若者には向上心があまり感じられず、諦めているような人が多いと感じます。今、中小企業の事業継承者がいないのが問題になっていると思いますが、40代、50代の人たちも上を目指す人がいないような気がするので、その人たちが元気になるような環境であれば、子どもたちにも鹿角はいい所だと伝わると思います。

(会長) これからの時代、高齢者の増加や子どもの減少は免れない中で、みんなが満足できる社会にするには難しい課題がありますが、個人的には、大人と子どもの距離感が遠くなっているように感じています。親だけではなく地域の大人も含めて、もっとまち全体が親戚のようになれば一体感を感じられるのではないかと思います。

(会長) 理想を実現するためには、痛みを伴う現実も当然あると思います。同じような状況の市町村が

たくさんある中で、他の地域よりも良くしていくためには身を切る覚悟も必要ではないかと思います。
(委員) 新しく野菜工場ができて、最初はあまり人を雇わないと聞いていましたが、今は結構従業員の車が停められているようですが、パートでしょうか。あのような会社がいくつかできれば、もっと働く場所ができるのかなと思いました。福祉施設は人手不足と聞きますが、あのような職場であれば、人が集まると思います。

(事務局) 40人くらい従業員がいるようですが、正規雇用は10人以下だと思います。あのような職種だけがあっても若者のニーズに合うとは限らず、野菜工場を増やしたから人が残るかというとはそうではなく、やはりバランスが必要です。これからは、むやみに企業誘致してもだめなのではないかと感じています。

(会長) バランスもそうですし、柔軟性も大切だと思います。世の中がすごいスピードで変わりますし、今後なくなる職業も出てくると思います。そのような状況にも柔軟に対応できないといけないと思います。

(事務局) 先ほど、十和田八幡平に対して市民の関心が低下しているというお話がでしたが、私は、子どもたちでも十和田八幡平は鹿角の宝だという思いは持っているのかなと認識していましたが、皆さんのまわりではどうでしょうか。

(会長) 学校によっては遠足で出かけたり、八幡平ではガイドの学習もしているようですが、家庭ではどうでしょうか。

(委員) 以前は地域の子ども会で遠足として出かけていましたが、今は子ども会もなくなってしまい、訪れる機会が少なくなってしまいました。家族で出かけるのはショッピングなどが多いと思います。

(事務局) 小さい頃に十和田八幡平に触れる機会が減っているということですね。

(委員) 私が移住してきて一番感動したのは十和田八幡平です。すべての季節を体験しましたが、色が素晴らしいです。都会から遊びに来る友人が鹿角の温泉に入って鹿角のおいしいものを食べて、みんな健康になって帰っていくのを見ると、鹿角全体がパワースポットだと感じます。県外の人に自慢できます。

(委員) メディアでも八幡平の秋の紅葉が取り上げられていました。今はアジア圏の観光客が増えていて、観光の形態も変わってきていると思います。

(委員) 鹿角のイメージは自然が豊かなところだと思いますが、地元の人には身近すぎて気が付いていない部分もあるのではないのでしょうか。

(委員) 鹿角の土地全体がパワースポットという表現がとても良いと思いました。

(会長) 自己評価で誇りを持てるのはいいですね。

●その他

(事務局) 今回も、幅広く貴重なご意見をいただきましたので、こちらでシートにまとめ、次回の会議でも共有したいと思います。

(事務局) 次回は第7次総合計画の基本構想案を示していきませんが、これからの資料の作り込みとして、事務局の意見も入ってくると思います。行政は総花的と言われても、やはり平均点以下でいいという分野を持つことはできません。平均点を目指しつつも攻めるところは攻めるところになると思います。

ますが、どのようにメリハリをつければよいのか、次回以降、皆さんからご意見いただきたいと思
います。

5 閉会 (20:20 終了)